

第八幕

登場人物…

フライ

フィッシュ

ビートル（仕立て屋）

オウル（墓堀り）

ルック（牧師）

ラーク（付き人）

リネット（松明持ち）

慌しく飛び回るフライ。

フライ 「大変だ！」

ビートル 「フライじゃない。大声を出して、いったい何事？」

フライ 「駒鳥が殺された」

ビートル 「ええ、何て事！ 悪い冗談じゃないわよね？」

フライ 「俺がこの目で見たんだ、本当だっつもの」

ちやぼん、と水からフィッシュが顔を出す。

瑞々しい、元気で可愛い少年のイメージ。

フィッシュ 「嘘じゃないよ、ビートルさん。」

ほら、これがロビンの血。

木の上から降ってきたんだ、背中も見てよ」

水面に背中を出し血痕で斑になった尾鰭を見せる。

ビートル 「まあ、フィッシュ。」

エメラルドの尾鰭に真っ赤な斑点！」

フライ 「解ったろ、解ったらさっさと準備しろ。」

♪誰が経帷子を作るんだ？」

予め決まっている事として、

尋ねるといふよりも確認するようなニュアンスで。

ビートル 「♪それは勿論私がやるわ。」

私の自慢のこの針で立派な経帷子を縫ってみせる」  
フライ 「よし。じゃ、次だ。」

オウルの野郎、この時間なら寢床か？  
くそ、あいつを叩き起こすとかかったりいな」  
すとん、と頭上からオウルが降り立ってくる。

オウル 「あふあ。こんな夕暮れ前から何を騒いでるんだか」

ビートル 「あら、いたのオウル」

オウル 「いたよ、最初から枝の上よね」

フライ 「何だ、起きてやがったのか。」

おいオウル。いたなら聞いてたんだろ」

驚き十面倒が省けて少し安心してている。

オウル 「駒鳥坊やが殺されたんだってね」

ビートル 「えっ、雛鳥なの？ 何て惨い……」

フライ 「なあ、俺、駒鳥が子供だとか男だとか言ったっけか？」

オウル 「言ってるないね」

フィッシュ 「本当だ、どうして判ったの？」

オウル 「私は森の賢者、梟<sup>ふくろう</sup>。何だってお見通しなのさ」

フィッシュ 「へえ、人は見かけによらないんだね」

ビートル 「ふふ、この人は夜の姿が本当の姿だものね。」

この眠そうな目がぱっちり開かれてるところなんて、  
想像できないのも無理はないわ」

オウル 「フライ、君……今『胡散臭』って思ったろ？」

フライの口真似、収録の際は一度フライの  
キャストさんに同じ台詞を読んでもらいそれを真似する。

フライ 「っ、いきなり首を百八十度こっちに回すな。」

心臓に悪いだろうが」

オウル 「へくつくつ笑い」期待通りの反応ありがと」

フライ 「性格悪ッ」

オウル 「褒め言葉かな？」

暖簾に腕押しな反応にうんざりするフライ。

フライ

「〈舌打ち〉…それはそうとして、オウル。

駒鳥が殺されたんだから、お前にも役目があるよ」

オウル

「お墓ならもう掘ってあるよ」

フライ

「は？」

オウル

「だから、お墓はできてるって。」

♪ピッケルとシャベルお墓を掘るのが私の役目。

…：間違っただけでしょ？」

フライ

「いや、確かに間違っちゃねえけど」

困惑するフライ。

オウル

「なら他の子達に声をかけておいで」

フライ

「それは！ 言われなくても解ってる」

オウル

「それにしても、

いったい誰が駒鳥を殺したんだろうね。

ほう、ほう、ほう」

第三幕同様、『ほう』の響きは『Who』に寄せる。

フライ

「はあ？ 雀のスパロウに決まってるんだろ。」

♪誰が駒鳥殺したの？

『それは私』と雀が言う。

駒鳥が坊やだとか余計な事は知ってるのに、

いっちゃん肝心な所をド忘れかよ」

歌の部分は少し早口に、あまりリズムはつけない。

わざわざ歌ってやるのも面倒くさい、というように。

オウル

「余計な事、ねえ。」

じゃあ一つ言わせてもらおうけど。

駒鳥はどうして殺されたんだろうね？」

フライ

「そんなの知るわけねえだろ。」

俺がやった訳でもないのに」

オウル

「犯人が誰かは当たり前みたいなの扱いなのに、

その動機についてはさっぱりなんだね。

いや、そもそも興味なんて湧く訳ないか。

皆がお葬式をしてあげるのは、  
殺されたのが駒鳥だから…：それだけだしね」

フライ 「何訳解んねえ事言ってるやがる」

オウル 「自分の胸に手を当てて考えてごらんよ。」

フライ、君はどうして皆に駒鳥の死を伝えるんだい？」

この辺りから徐々に『目撃者』という

アイデンティティがよく解らなくなってくるフライ。

フライ 「それは、俺が目撃者だからだ。」

目撃者が報せないで、誰が報せる」

畳み掛けるように間髪入れず。

オウル 「だから？ 何のために？」

少し逡巡。

フライ 「それは。死んだなら、墓が必要だから」

オウル 「墓を必要とするのは遺された者の方だよね。」

駒鳥は誰を遺して死んだの？

君が駒鳥の死を伝えて回る相手は、

駒鳥にとっての何？」

フライ 「…：…、っ」

答える言葉が見付からず、絶句する。

オウル 「ほら、ね」

フライ 「ん、だよ…：。じゃあお前は、

吊ってやらない方が良いとでも言うのか!?

駒鳥は俺の目の前で死んだんだぞ！」

オウル 「そんな事は言ってるないよ。」

そう、駒鳥坊やは可哀想な子だしね。

もちろん、きちんと吊ってあげるべきだ。

だから、私だって陽の高い内から墓穴を掘った」

フライ 「じゃあ、何が言いたいんだよ」

オウル 「私はね、フライ。」

このお葬式は形だけのものだと思ってる。

予め定められた役割を私達はただこなすだけ。

こんな茶番が愛されているなんて、

大層悪趣味な話じゃないか」

フライ 「愛されてる……？」

怪訝そうに、葬式を愛するなんて

不謹慎だという普通の道徳的な感情も込めて。

オウル 「嗚呼、そうさ。愛されてるのさ。」

例えマザー・グースを、

我らが偉大な魔女グースを知らなくとも、

このフリーズを知っている者はごまんという。

君も、聞いた事くらいあるんじゃないか？」

最終行はリスナーに向けて、一つ息を吸い込んで厳かに。

オウル 「誰が殺した、駒鳥を——とね」

少しの沈黙。

フライ 「……は、何言ってるんだよ。訳解んねえ。」

第一、何だ。マザー・グースを知らない？

そんな物知らずがこの世界のいったい

何処にいるっていうんだよ、ありえねえ」

戯言だと笑い飛ばすフライ。

フライ達にとってマザー・グースは当たり前の存在。

知らないなんて有り得ない、という気持ちを込めて。

オウル 「君の反応は無理もない。」

私達にとってマザー・グースは唯一無二の支配者で、

ここでは全てが彼女を中心に回ってる。

彼女と同じ力を持つ者がいるとしたら、イソップ、

グリム、ペローに後はアンデルセンくらいのものか。

まあ……残酷さという点ではマザー・グースを凌ぐ

ならグリムかペローになるだろうけど」

解説参照、リスナーに対する説明台詞に当たる。

フライ 「んな名前、軽々しく羅列するな！ 罰当たりだぞ」

オウル 「へ肩を竦めやれやれ、という風に小さく笑う」

その反応も、仕方ないけど」

雰囲気を変えるように切り替えて。

オウル 「ま、それより今はお葬式だったね。

フライ、引き止めて悪かった。

暗くなる前に他の皆にも報せておいで」

フライ 「言われなくても解ってる！ 〈舌打ち〉

何だよ、勝手にべらべら喋っておいて。

…：フィットシュ、行くぞ」

フィットシュ 「はあい。二人共、あんまり長いから

ビートルが経帷子縫い終えちやったよ、もう」

オウル 「悪いね、待たせてしまつて」

ビートル 「私は気にしていないわ。

ところでオウル、お墓は何処に作ったの？」

オウル 「ネズの木の下だよ」

フィットシュ 「えっ」

フライ 「…：」

フィットシュとフライの反応はほぼ同時。

二人の反応を見たか見ないかの内にすぐ飛び立つオウル。

少し首を傾げつつもオウルを追うビートル。

ビートル 「…：？ それじゃあ、また後でお会いしましょう。

オウル、待つてちょうだいな」

二行目はオウルの去った方へフェードアウトしながら。

フィットシュ 「あ、またねー。

えっと、じゃあ僕らも行こうか？」

フライ 「何なんだ、あいつ。ネズの木の下だつて？」

フィットシュ、呼びかけを無視され一瞬きよとした後。

フィットシュ 「…：駒鳥が死んだ場所だね。偶然、なのかな」

フライ 「森の賢者か何だか知らないが、気味悪いぜ…：」

く場面転換く

ちやぼん、ちやぼん、とフィッシュが小川を跳ねる音。  
その上を飛ぶフライ。

フィッシュ 「あー、ルック達見ーっけ！」

フライ 「おい、ルック、ラーク、リネット！」

ルック 「これはフライ、どうしたんですか」

フライ 「駒鳥が殺された」

三羽 「「へざわめく」」

ルック 「♪それなら私は、この聖書を手に、

牧師を務めねばなりませんね」

ラーク 「♪だったら私が付き人としてお手伝いするわ。

ただし、お葬式が真っ暗闇でなければだけど。

…夜は、怖いから」

いかにも守ってあげたくなるようなか弱げな呟き。

リネット 「大丈夫だよ、ラーク。

♪僕がすぐに松明たいまつを持ってこよう。

この胸の模様みたいに、

真っ赤な炎で照らしてあげる。

だから、君は安心して自分の役目を果たせば良い」

ラーク 「それなら私も平気だわ。ありがとう、リネット」

ルック 「お墓と棺の準備はできているんですか？」

フライ 「墓はもうできてるってさ。棺の方はこれからだ」

リネット 「僕達は何処に向かえば良いのかな？」

フィッシュ 「この川を少し遡った先の、大きなネズいわの木の下だよ」

ルック 「ネズいわの木ですか。何とも曰くいわのありそうな…」

フィッシュ 「へ？」

リネット 「でも、お墓にするには悪くないね。

知ってるかい、ネズは永遠と再生を

象徴する樹だとも言われてるって。

小枝を焚いて燻せいぶば悪いものは浄化され、  
煎じて飲めば病を癒してくれるんだとか」

ラーク 「きつと神様のご加護がついてるのね。」

駒鳥さんもきつと安らかに眠れるはずだわ」

フライ 「どうだかな」

ラーク 「え？」

フライ 「安らかに眠れる訳わけやねえよ。」

永遠とか再生とか、それよりもっと重大な事がある」

リネット 「どういう事？」

フライ 「駒鳥は、ネズの木の下で死んだんだ」

リネット 「へ息を呑む」

ラーク 「……そんな所に、お墓を建てたの？」

眉を顰めるラーク。

嫌そう、というよりも怖がっているような感じで。

フライ 「俺の知ったこっちゃねえよ」

ルック 「では、誰の提案です？」

おずおずと切り出すフィッシュ。

フィッシュ 「オウルだよ。」

墓穴をもうそこに掘ってあるんだって」

一同 「……」

わたわたとフォローするように。

フィッシュ 「僕は馬鹿だからよく解らないけど、

オウルが決めたんなら悪い事はないんじゃないの？

だって、森の賢者なんでしょ？」

ルック 「へ細かい溜息」……なるほど、オウルのね」

ラーク 「ええ、それなら間違いはないわ」

リネット 「うん、オウルの決めた事ならね」

ルックは心情としては賛成はし切れないものの、

何やらオウルに意図があるのだろうと理解した風に。

ラークとリネットは少し躊躇しながらも、



ルックが納得した様子だし、オウルのする事なら自分達が口を挿むべきでもないし引き下がる。

そんな鳥達の微妙な力関係を前にして軽く沈黙する二人。

フラ・ファイ 「……」

ルック 「ともあれ、早くしないと暗くなってしまう。

フライ、まだ他にも声をかけるんでしょう？」

フライ 「嗚呼、そうだな」

ルック 「それならさあ、私達も行きましょう。

ラーク、リネット」

ラーク 「ええ」

リネット 「分かった」

立ち去り際、ルックがフライに耳打ちする。

ルック 「オウルの“つもり”は知りませんが。

賽はもう、投げられているようですしね？」

フライ 「〈溜息〉……お前ら鳥共の事はよく解んねえよ。

何か調子狂うわ、いつも」

ルック 「はは、まああまり真剣に考え過ぎない事ですね。

私達は空を漂うリトル・リドルですから」

ここからリスナーに向けて。

ルック 「貴方も、あまり気にはいけませんよ？

魂が天に向かう時、

それを運ぶのは鳥だと言いますが。

そんな信仰と私達に何の関係があるのかなんて。

今は然したる問題ではないのです」

解説..

童話作家を魔女に見立てている。

グリム、ペローは『本当は怖い〇〇童話』という風に  
取り上げられる事も多い作家達。

マザー・グースも『本当は怖いマザー・グース』と  
紹介される事があるため、これらの作家は  
作中世界においては『魔女』という扱い。

これに対してイソップ、アンデルセンは  
比較的優しい童話が多いため、扱いは『良き魔女』。

監督宛..

第三幕に続いたサブキャラ総登場回前半です。

初出はフィッシュ、ラーク、リネット。

フィッシュは無邪気な少年。

エメラルドの尾鰭以外は特に指定なし。

ラークとリネットは穏やかな愛らしいカップル。

ラークは素朴で純粋な愛らしい少女。

淡いブラウン〜ベージュで地味にまとめつつ、  
くりつとした目でコンパクトな可愛さを。

リネットは朴訥とした青年。

胸（と額）の真っ赤な差し色が印象的なナイスガイ。